二葉亭四迷全集 第四巻

二葉亭四迷全集

第四卷

二葉亭四迷全集　第四巻

昭和三十九年十二月二十三日　第一刷発行　©　創作・飜譯四

定価四〇〇円

著者　二葉亭四迷

発行者　東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地　岩波雄二郎

印刷者　東京都板橋区板橋町六丁目三二八九番地　白井知一

発行所　東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三　株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

三陽社印刷・松岳社製本

目次

二狂人（ゴーリキイ）……三
狂人日記（ゴーゴリ）……三七
出産……六一
閑人……六七
乞食（ゴーリキイ）……七一
平凡……九九
志士の末期（ポリワーノフ）……二〇五

椋のミハイロ（ボレスラーフ、プルース）……三二
愛（ネモエフスキイ）……三三一
血笑記（アンドレーエフ）……三三五
おひたち（ゴンチャローフ）……三〇七
けふり（ツルゲーネフ）……三一九
茶筅髪……三九九
「平凡」「血笑記」の反響……四二三
解説……四三九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

二　狂人（ゴーリキイ）

職に離れた田舍教師のキリール、イワーノウヰチ、ヤロスラーフツェフは卓子に肘を持たせ、兩手で顳顬を確と壓へ、前に散らけた統計表を茫然諦視て、さて此四角な紙を如何したものかと、散々使つて草臥れた腦髓から、此智慧一つ絞り出さうと試みた。

が、どうも旨く行かない。頭の中で、籠つた音に、何かざわつく。何でも重みのある濁つた物が一杯詰つてゐて、其が內部から頻りに眼を壓して、無理無體に外へ押出さうとしてゐるやうだ。數字が表を脫けて、忽ち消えるかとすれば、又現はれて、何だか知らぬが、味も卒氣もなく冷然と示してゐる。或は蹙まつては、細かい〳〵曖昧な蹦り書の文字のやうなものになり、又は忽ちパッと擴がつては、變な搜削けた物の形になる。この數字の出沒變幻するのを視てゐると、何處か心の底の方から惱ましい騷々しい思想が勃々と浮び出て、次第に凝固りさうで、まだ正體は何とも分らぬが、いづれ是は表面へ出て來るに違ひない。此奴が出て來たとなつたら、その辛さ苦しさは、中々今のやうなものではないと思はれる。

近來は此厄介な思想に困しめられることが日を經るに隨つて愈々頻繁になる。これが秋の雲のやうに冷たく濕潤と、一切を薄暗くして、其の去つた跡には憂鬱と腑の脫けたやうな冷淡な心持が黴のやうに靈性を蔽ふ。で、此思想が纏つて意識に上る迄には大分手間取れるが、其處に何やら免れ難い因緣でもあるやうに、如何なる場合に、如何なる手段を用ひても、曾て其發展を妨げることが出來ぬ。衝と起つてみる、部屋を步いてみる、歌を唱つてみる、知人を訪うてみる、種々な事をやつてみるが、此思想が歌ふ聲を消壓し、何處へ行つても跟を隨けて來て、片時も側を離れぬ。

初の內は根氣よく之と鬪つてみた。が、鬪へば疲れるばかりで何の役にも立たぬのみか、愈じ反抗すれば、反て渾沌たるものに眼鼻が附き、劃然際立つて來て、一段と心を壓迫するやうになる。そこで最う反抗せぬ

ことにして、其影が射すと、卒然長椅子に寢轉んで、頭の下に兩手を敷い、四も五も言はず其自由に成つて了ふやうにした。

かうして二時間、三時間、時とすると一夜を過すことがある。其間は何の事はない人間が二つに割れたやうなもので、時の經つに隨ひ次第に小さくなる一方が、例の思想に惱まされる一方を、情なさゝうに便りなげに諦視てゐる中に、その惱ましい思想が人生の光明とも花とも見るべき、凡そ空想の生む一切のものを、碓でゞも搗いたやうに、微塵に碎いて、何の色香もない、舌を刺すやうな味の物にして了ふ。

凝と天井を諦視て、我心臟の鼓動の音を聽き、貸間主のお神樣の部屋でボン〳〵時計の振子の動く音に耳を澄してゐると、コト〳〵〳〵と振子が拍子を取つて鳴つてゐる。安心決定して何の疑ふ所もなく斯うコト〳〵とやつてゐるのを聽いてゐると、其に卷込まれて自分も何とやら徒に物を思ふのでは無いやうな氣がする。兎角する中に何時しか物思にも慣れて了ひ、唯其影の射す時に何となく怖けるだけで、それも屈托にかまけて了へば何とも思はぬが、其事が果てれば又舊に復つて、影が射せば矢張怖ろしい。

が、軈てその怖ろしさが別樣の形式を取つて、心配となつて現はれて來るやうになる。かうなると何事か起りさうで〳〵、それが氣になつて片時も忘られず、くさ〳〵して了ふ。それが亢じて、その怖しい事の起るのを一心不亂に待つやうになる。と、もう何か鬼のやうな者が今にものさばり出て、長椅子の側に徜立ち、無氣味な身振をしつゝ、恐ろしい權幕で、

「お主が何を考へてをるか、乃公はチヤンと知つとるぞよ。知つとるとも、何事も此方見徹しぢや。お主の腦髓が何處で何分曲つとるといふ事までチヤンと知つとる。お主のやうな生活に嵌らん、生活から彈き出されたやうな人間が其樣な大それた事を考へるとは、身の程を知らん話ぢや。こら、何で其樣な眞似をするのぢや？　其樣な眞似をすると、斯うするぞよ……」と其罰として見すべき憂目、それを仕方で爲て見せる。

こんな事を想像しながら、縮み上つて、情なさゝうに入口を視返へる。

入口の戸は薄ペラな脆弱い出來で、加之も掛金は針金だ。者奴は萬事見徹しだといふに、そのお見舞ひを此樣な物では防げぬ、いや、如何な物でも防げる筈がない、譬へば煉瓦の壁なりとも、スッと其中を拔けて來る奴だ。であるから、之を待つ身になつては、ゴトリといふにも惕として、知らぬ人さへ見れば、胡散さうに其擧動に注意してハラ〳〵する。けれども辛氣な物思は度重なれば益々募つて愈々身に附纏ふ。今一息で之に頭から丸呑にされるかも知れぬ……と思ふと、何やら眞黑けな慄然とする程凄い物に行當つたやうな心持がして、と胸を突く。

「如何したら此苦患を遁れやう？」

と稍機嫌の好い時には自問して、かう自答する、

「手向ひせぬに限る。全然身を任せて了つたら、反て何とも感じなく成るだらう。」

で、此時も例に依つて長椅子に寢轉ばうとすると、忽ち倉皇しく背後の戸を明放つて、ッカ〳〵と人の入つて來る氣色がして、草臥れた聲で、

「や、居たな！ 漸く一人だけ見付けた……やれ〳〵！」

椅子ながら振反つて見ると、統計局出仕の一知己で、役所では此人の事を半低音君と諢名を呼ぶ。半低音君は椅子に就いて、片手に白の帽子を提げたまゝ、片手で額に玉なす汗を押拭つた。顏色蒼褪めて且つ窶れ、眼中は血走り、見た所如何にもガッカリした體である。

主人のヤロスラーフッェフは客の側へ寄つて、怡々と、其癖默つて凝と其手を握つた。此人が來たばかりで、例の物思ひに襲はるゝのを免れ得た。

「暑い中を狂人のやうに飛廻つたが、皆留守さ」、と半低音君、實の名はピョートル、ワシーリエウッチ、バプキンが不平さうに口元を引歪めて言つて、さて目を瞑つて、その上を指の腹でわな〳〵と擦るところは、睫毛に何か付いてるのを拂ふやうな手附だ。

「誰を搜して歩いたの？」

と聞かうとする、その先を越して、

「かういふ譯だ……が、何だよ譯を聞いてから厭だ何ぞと言ひッこなしだよ。僕あ最う到底も堪へん。二晩打通して介抱したンだもの。もうゲンナリした。リャホフや何かは實に酷い……だつて、譯を言はなきや分るまいが、何さ……それ、何さ……えゝと、あれは……クラフツォフ！　クラフツォフがね、君氣違ひに爲つたのだ、もう三日になる。何だか譯の分らんことを、や、饒舌る〳〵！　しかし、時とすると、夢中で言ふのでも無さゝうな、至極氣の利いた事をも言ふ。それで何さ……僕は二日間打通して介抱やつたんだ。もう此上は御免を蒙むる。非常に疲れた。病人は逆らふと氣が暴くなつて、喧嘩を吹ッかけるが、といつて放つとく譯にも行かん。途方もない事を行らかすからね。靴墨で壁を塗り出すしさ、赤裸になつてブラシで胸を擦るね、何でも大聖人の積りか何かで徊癸つて來るンだから、吹出したくもなるが、目も當てられない……尤もウンザリもするがね。醫者は見舞つて呉れる。病院へ入れやうといふので今運動中だが、此奴が中々右から左へと運ばん。兎に角皆が腹の立つ程形式に流れて了つて、人間らしい所が少しも無いンだ。見舞ひに來たつて、戸の隙間から一寸面を出して、少しばかり同情を表して置いて、而して歸つて了ふンだ。皆暇が無い、何かしら用が有る。僕は最う到底も辛抱が出來んと思ひ玉へ。君一つ行つて呉れんか？　え？　今はルイジンが附いてるのだ。そりや君はクラフツォフとは餘り懇意ではない、そりや僕も承知だが、其樣な事は君如何だつて好いやねえ？　ねえ、君、然うだらう？　行つて呉れるだらうね？」

「さう……無論、そりや、何だ、そりや、行かう。何なら是から直ぐでも何だが……」と、しかしあまり逸んだ樣子でもなかつたが。

「その事〳〵！　直ぐに限るよ」、と客は狼狽て其言葉に縋つて、もう退引させず、而して說明までする。

「實はね、ルイジンも二時間程經つたら交代する約束で、辛と承知させて來たンだから、然うして貰へると

頗る好都合だ。ぢや、行つて呉れ玉へ！なに君は健康だから、然う難儀なこともあるまい。こんな事なら、先刻のツけに君の處へ駈付けりや好かつた、氣が附かなかつた。さうすりや、此樣にヘト〳〵になるンぢやなかつたものを……ぢや行つて呉れるね？」

「よろしい……一緒に出懸けやう。」

半低音君は起上つて、ポンと無造作に帽子を冠つてから、一寸その格好を直して、戸を開けかけて振反つて視ると、ヤロスラーフツェフは下唇を噛むで凝と出て行く友の足元に目を附けて、考へ〳〵遲々外套を被にかゝる所であつたが、此方は委細構はず、

「おゝ、さうだツけ……君は彼男の下宿を知つてたね？ぢや、君一人で行つて呉れんか、僕は是から直ぐ家へ歸るから。ね、よろしいか？難有いッ！そりや、君、何だぜ、僕は本當に……」

後は戸口で言つたので、キイと齒の浮くやうな戸の軋み音に消されて、聞えなかつた。この戸の軋む音を聞くと、ヤロスラーフツェフは悚ッと震ひ上つて、苦い面をして、椅子の上へ腰を落して了つた。悲しい報知で頽然氣落がして了つて、もう立つてはゐられなくなつたので。

クラフツォフと聞いて目の前に浮ぶのは、中背の、干乾びたやうに骨張つた、黒い髭の能く動く、扁桃狀で黒目勝の、燃ゆるが如きキョロ〳〵眼の男であるが、その色白の皺だらけの額を濃き眉の上下に動くことは凄じいもので、釣上つては剛い逆け髮に逼らんとし、垂れては眼窩を沒せんとする。時とすると話をしながら左の細長い指先で、同じく左の眉を壓へて動かさぬことがある。其時は右の眉だけ釣上つて、面が歪になり、身を細うして何人も到り得ぬ境に深く入込み、何人にも摑めぬものを摑まうと氣張つたやうな、苦しさうな、鋭い面相になる、而して眼中には鋭どき光を持ち、悲しさうな、嬉しさうな、切なさうな色を一杯浮べる。

久しい前から精神に異狀があるやうに噂せられて、成程然うかと思はれる事が毎日のやうにある。例へば

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

今日天文の窺奥を極めん爲め數學を研究したいと言ふかと思へば、明日は田舍へ引込んで心の平和を恢復したいの、亞米利加へ行つて、牛羊の群を逐ひつゝ、曠野の中を彷徨きたいの、或は製造場へ行つて職工間に社會主義を宣傳したいの、又は手工を覺えたいの、繪畫を習ひたいの、音樂をやりたいのと、種々な事をいふ。こんな事が自分に必要だと固く信じて、一々明白に其理由を述べる、若し反對でもしやうものなら、熱して殆ど狂せんとする。而して自分の之を希望する動機は主として自衛に在ると曰ふ。

「人間として何も爲ずに死んで了ふのは、餘り馬鹿々々しいからね。動物でも何かしら爲る、況や僕は人間だもの、何か爲なきや」、と能く此樣な事をいふ。それで哲學者と諢名を呼ばれるけれど、其癖自分の意見、行爲、希望に辻褄の合つた理由を付け得た例がない。いつも獨斷的に簡短な格言めいたことを言つて濟まして置くので、皆此人の事を大言家だといふ。もう珍らしくもないので、關ひ付け手もない。リャホフは教育のある聰明な男で、其奉職する物產稅務局でも相應に幅の利く官吏であるが、此人ばかりはクラフツォフが最負で、彼れ決して馬鹿ではないが、唯惜むべし、足の踏處があやふやで、才が志に副はぬと評してゐる。ヤロスラーフツェフは此人には目を吳れぬ連中の一人で、遭ふことは有つても、研究したことが無いから、其人と爲りを知らぬ、唯皆が精神に異狀のある男だと曰ふから、其說に雷同して、大方然うだらうと思つてゐた。

が、今となつて見ると、このクラフツォフが急に堪らなく面白い。五日程前に一緒に舟遊をやつた。其時話をした所では格別異つた所もなく、反ていつもより沈着いてゐる位であつた。然るに今や其人が狂人になつたと云ふ。狂人になつたと云ふけれど、彼時舟では自分の臂を把つて、例の激越の調子で盛に論じた。論旨は、デモニーズムだの、シンボリーズムだのといふ病的思想は、常規を逸した點はあるが、物質主義の弘布に對する必至の反抗で、物質主義は早晩識者の眼中

其信用を墜すに違ひないといふに在つて、義理も明晰で聽くべき價値があつた。と思ふと、クラフツォフが金切り聲を振絞つて言つた次の文句が又しても想出される。

「今の思想界の惑亂の原因は全く理想主義の衰微に在る。此世からロマンチーズムを追出した連中は人間を裸體にして了つたので、爲に人間同志の關係は無味枯淡になつて、お互に愛相が盡きて了つた。まだ〳〵吾々の精神は固まらん、かるが故に眞實を暴露られると、害を受ける。飾氣のない眞理は當に人間に利がないのみならず、反て害になるかも知れん。」

が、狂人になつてからは、如何なことを言つてるか知ら？ 一體狂人といふものは如何いふのだらう？

誰やらの說に、狂人とは一の心力の作用が他を壓倒した狀態に外ならぬといふ。又誰やらの說には記性が一の事件又は思想に驚動せられた狀態だといふ。

してみると、人心は先づ螺旋裝置のやうなものだ。幾條かの螺旋が伸縮して、其處に運動を起し力を生ずると、思想が湧く。然るに忽然として一條の螺旋が他の螺旋よりも縮み過ぎでもすれば、全體に狂が生じて、新に調子づくか、又は舊の調子に復る迄は、それが止まぬ。或は何か重たい衝動を起すべきものが外から來つて其裝置の中に入り、恰も過去の記錄を掌る螺旋の上に墜下すると、其響きで其螺旋は新事實を錄す能力を失ひ、始終同一の事を反覆する結果、その呈する所の現象に變化がなくなる、といつたやうなものかと思はれる。

「極て單純で、又極て愚然なものだ。が、しかし、何の必要があつて人間が狂人なんぞになるんだらう？ それでなくつてさへ病氣だの、災難だの、ウンと背負込んでるンだ」、と考へて、ふと想出せば、「おゝ、さうだッけ、病人の介抱に行かなきやならなかつた。」

が、起ちも上らず、行きもせず、帽子を冠つて、外套を被て、椅子に掛つたまゝ、尙ほ考へ續ける。

「が、若し偶とクラフツォフが天才になつてたら？ 天才は狂氣だと云ふ。誰もまだ天才の出現する樣子を

語つたものはない。事に寄ると、氣が狂れると、同じ事だが、觀念の奴になると、或は觀念を奴にすると言はうか……」

何遍か一つの語を反覆して言つて見たかつたが、薄氣味悪かつたので、それは止した。語が種々の色彩を帶びた斑點のやうなものになつて、譬へば無際涯の空間にフワ〳〵と散かつた雲か何ぞのやうに思はれる。其跡を追つて飛んで行き、捕へて之を額合せさせると、一條の紅霓が燦と棚引く、これ卽ち思想だ。若し夫れ之を空氣諸共吸込んでまた吐出すと、鏗然と鳴つて言句が成る。

「が、しかし單純なものだ」、と心ゆくばかり笑つて、「デカダン派の連中は流石に鋭い。針のやうに先が尖つてる。だから深く神祕へ頭を突込むだのだ」、と指を彈いて得意になつて口走つた。

部屋の戸がギイと開いて、お神樣が覗き込むで、「まあ、外出の服裝で、坐り込んで笑つたり、獨言をいつたり……大層お忙しうございますね。お茶を喫りますか？　それとも何處かへお出懸け？」

口は憎いが、目が優らしい。金壺眼でも活氣があつて、顳顬へ掛けて小皺が寄つてゐるので、いつも笑つてゐるやうだ。

お神樣に斯う言はれると、ヤロスラーフツェフ甚く頽然して、今何處からか歸つて來たやうな心持になる、「茶かね？　茶は要らない！」と手眞似で茶を追拂らつて置いて、「これから出懸けるのだが……事に寄ると、今晩は歸らんかも知れませんよ。ねえ、お神さん、友人で狂人になつた者が有るンだが、如何いふ理由で狂人なんぞになるンだらう？」

「おや〳〵、まあ、氣違ひに？　此間はピストルで死んだ人が有つたのに、又狂人が出來るなんて、貴方のお友達は皆厄介な人ばかしね。如何いふ理由で狂人になるッて、それが皆神樣の御都合ぢや有りませんか。」

「神樣の御都合？」と考へ〳〵、何故だか帽子を脫つて、「妙だね……實に妙だ……全く！」

「誰方か狂人に成つたんですえ？　あの方ですか、あ

の、ほら、赤ちやけたジヤンジヤラ髪の、鼠のヅボンを穿いてる、あの方ですか？ それとも、あの、面白い、金縁の鼻眼鏡を掛てる方ですか？」

とお神様が聞く。その小皺だらけの大きな面にも、聲にも、同情が一杯含まれてゐたので、ヤロスラーフツェフは急に何だか悲しくなつて來た。

「いや、違ふ。髪の毛の黑い、いつもトンビを着てステツキを持つてる、そら、能く眉毛を動かす、あの男です」、と聲を落して眞になつて言つた。如何やら咽喉元が擽ぐツたいやうで泪が零れさうだ。

「ぢや、薩張り當りが附かない。滅多にお出でなさらない方なんでせう？ 何だかお目に懸つたことが無いやうだ。ぢや、まあ行つてらッしやいまし——だが、餘り永居なさらない方が好うござんすよ。人の看病どころか、御自分のお顏を御覽なさい。色光澤の惡いことてッたら！……」と突慳貪にいふ。

で、ヤロスラーフツェフは又帽子を冠つて、起上つて、默つて部屋を出たが、悲しさは胸に充ちて氣も萎え〳〵となつてゐた。

「錠を卸してッて下さい」、とお神様が後から喚いたが、

「いや、其儘で宜しい！」と悲しげに首を掉つた。

もう午後六時ごろであつたが、外はまだ中々の暑さで、往來の敷石も、家々の壁も、カッ〳〵と熱るやうで、雲の見えぬ空までが暑さうだ。垣越しに往來を覗く埃まぶれの植木の葉はそよとも音せず、天地が寂と謐まり返つて、何事かの起るのを、今か〳〵と堅唾を呑むで待つてゞも居るやう。

とある白壁造りの家の開放した窓の中からピアノの音が聞えた。調子も整はぬ秩序のない音色で、それが頭の上を掠めて空を狂ひ行く。と、ヤロスラーフツェフは恟ッと震上つて立止り、きよろ〳〵と四下を視廻した。この騷で何ぞ其處らに變つた事は起らぬかと視廻したやうな樣子であつたが、往來は相變らず寂寞たるもので、其中にピアノの音は消える。聞えたのも無意味であつたが、聞えなくなつたのも無意味であつた。

「音響の命は短いものだなあ！」と唐突な事が頭の中に閃と浮んで直ぐ消えて了ふと、その反響でもあるかのやうに、アオエオアと、節廻しも俗曲めかして、高調のファルセットで、一番歌つてみたくて堪らないのが總身に染渡る。が、強ひて此念を抑へて歩き出したが、之とは全く縁のない別の事が頭の中でごた〳〵するので、自然と頭垂れて、此紛々を足拍子に合せて一つ〳〵言葉にしてみやうとする。と、言葉が腹の中で大太鼓でも叩くやうに鳴り渡る。しかし斯う足拍子に合はせて考へつゝ行くと、胸の中、腹の中、身體中全體がスッキリ透いたやうに爽快になつて、何となく筋肉が暑さに濕けて了つた跡に、彈力のある細かい神經ばかりが殘り、其にしめやかな、哀れッぽい、四下の物同様に、何かを待つてるやうな調子が附いたらしく思はれる。

ふとクラフツォフの事を想出して、「今頃は如何なことを饒舌つてるか知ら？　如何いふ考へでゐるだらう？　が、待てよ、己は行つて如何したものだらう？　大方言ふ事は理が分るまいから、側に附いてるのは、無益な話だ。一體何で狂人の看護なんぞをする氣に成つたんだらう？　好奇心かしら？　それとも同情かしら、或は唯義務と思つたばかりか知ら？　氣違になりや死んだも同然だらうが、まだ全く氣違になり切らずに居たら、己は唯彼男の悶くのを傍觀するだけの事になる。妙なもんだな、人間といふ奴は達者で無難の時にや何でもないが、死かゝると面白くなる。能くあるやつだて、生きてる中にや生きてることにも氣の附かない程詰らん奴でも、ふッと死んだとか、死にかゝつてるとか聞くと、可哀さうになつて其噂をする……死だり死にかゝつたりすると、人間と人間との間が接近するやうだな。此處に何でも深い意味があるに違ひない。でなきや、大僞善が潜んでるのだ、唯昔から慣れッこになつてるので、誰も氣が附かずに居るのだ。それとも何かしら、人の死ぬのを見てゐると、自分も何時か一度は死なゝきやならんことを想出して、それで他を憐れむは卽ち自ら憐れむ所以といふ譯かしら？　してみ

ると、こいつは狡猾の分子を含むでる、寧ろ卑劣だ。しかし人間界の事は總て狡猾で卑劣だからな……だから同情といふやつは殘忍なものだ。慈悲にして且つ殘忍か。やれ〳〵！　とはいふものゝ、全く同種の言葉だものな、意味から言やシノニムだもの。それを今迄皆が氣が附かずに居るとは驚く。こいつあ一番論文を書いてやらなきゃ。一廉でも間違ひの滅つた方が好い。」

此眞理を發見すると同時に、曾て田舍であつた事だが、それを憶出した。或時さる百姓の飼つてゐた牝の犢が坑へ落ちて、前脚を二本とも折つたことがあつた。殆ど村を擧つて見物に駈付けると、犢は哀れな風で坑の底に倒れ、悲鳴を擧げながら、大きな目を濕ませて人々の面を視め、幾たびか起上らうとしては、幾たびか倒ける。その呻きつ悶きつするのを、村人は周圍に人垣を築き、愍むよりは興がつて見物してゐた。ヤロスラーフツェフは面白くも何ともなく、反つて悲しくてならなかつたが、矢張其中に交つて見物してゐると、忽ち鍛冶屋のマトウェイといふのが何處からともなく出て來た。雲衝くばかりの大男で、髪の毛が黑く、一癖あるべき面魂で、粉炭に汚れて眞黑になつてゐたが、見れば兩袖を拷し上げて片手に重さうな鐵の棒を提げてゐた。黑い目に佶と四邊の見物を睨廻した序に、ヤロスラーフツェフをも睨付けて、眉を寄せるかと思ふと、首を一つガックリさせて大喝した。

「馬鹿野郎めらが！　何を見てけつかるだあ！」

で、提げてゐた鐵の棒を振翳して、やッと犢の腦天目掛けて打卸すと、冴えぬ、拍子の脫けた音がしたが、それでも頭蓋骨は割れた、無氣味な觀物であつた。犢は其なり吼止むで、もう大きな濕み眼に痛みを訴へなくなつた……と見て、マトウェイは悠々と其場を去つたッけが、

「いや、彼奴の慈悲は又格別だ。人間でも、到底も治らない病人だつたら、彼奴の事なら矢張り如彼して了ふかも知れん。それで一體道義に合ふものか知らな？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb